伝空海撰『雑問答』について

——宥快の引用を中心に——

林 山 ま ゆ り

『雑問答』（または『真言問答』^①）は、空海の著作として、東密や台密の諸文献に引用がみえる典籍である。^②

『弘法大師全集』の『雑問答』本文末に附された編者の言や『密教大辞典』の解説によると、『雑問答』は頼瑜（二二二六～一三〇四）や杲宝（一二三〇六～一三六二）の頃までは、空海の真撰として依用されていたが、宥快（一三四五～一四一六）は真撰を疑い、用否の取捨をしていたということが指摘されている。また、宥快以降では、江戸時代に、運敵（二六一四～一六九三）と浄嚴（二六三九～一七〇二）との間で真偽の論争が行なわれていたと見え、現在では、異本『即身成仏義』などと共にほぼ偽撰書として、『弘法大師全集』第四輯・真偽未決部に収載されている。

宥快が『雑問答』を偽撰であると疑っていたということは、かなり知られるところとなっているのであるが、なぜ宥快が偽撰であると判じたのかという理由については明らかにされていない。そこで、小稿では、『大日経疏鈔』、『宗義決択集』

『即身成仏義鈔』の引用箇所から、この点について検討してみたい。

まず、宥快が『雑問答』を真撰として扱う例として、『大日経疏鈔』がある。法界宮の釈文では、「大師処^ノ解^ノ釈^ノ分明也。宝鑰竝真言問答等^③と見え、『秘藏宝鑰』と『真言問答』を並べ、共に空海の作としている。また、那羅延力の釈文では、「又大師今一段意^ヲ重重問答^{シテ}被^レ釈^ニ顯其意趣一時^④問、此金剛等^ノ中、那羅延力大那羅延力執金剛者○豈論同日^⑤文」と見える。この文でも、空海の著作として『雑問答』の略抄文を引用する。

以上の二例から、『大日経疏鈔』では、『雑問答』を真撰と見做していたと仮定してよいだろう。また、『大日経疏鈔』は宥快晩年の著作であるので、宥快は生涯『雑問答』を真撰としていたのではないか、とも考えられる。

それでは、『弘法大師全集』や『密教大辞典』の解説のように、宥快が偽撰と見做す根拠をどこに求めることができる

のか。

『宗義決択宗』『三密具不具』では、「大師一処ノ釈ニ密答三密修行頓悟ノ証文ニ引之ヲ也」⁽⁶⁾と『雑問答』を「大師一処の釈」として真撰であるとする。一方、「自性会因人」の論義では、自性会には因人が居ないとする難者の証文として『雑問答』が引用されるが、その答文では、「真言問答ノ釈ハ者、彼ハ有ル疑書ナルカ故ニ、不足レ為ニ誠証ト」⁽⁷⁾と述べ、『雑問答』を疑いのある書だとして退けている様子が窺える。さらに、「次ニ真言問答ノ文ハ、非ルカ大師ノ述作ニ故ニ難シニ依用シ」⁽⁸⁾。是レ即チ彼ノ書ニ引ニ証スルカ大師以後ノ翻訳ノ経等ノ文ヲ故、非ニ大師製作ニ歟（彼書引心地観経）」⁽⁸⁾とも見え、空海の頃に未だ日本へ渡つてきていなかった『心地観経』が引用されていることを根拠に『雑問答』を偽撰の書として判じている。

このように『宗義決択集』においては、真撰とする一方で、『心地観経』の引用によつて偽撰と見做す真偽両方の立場を見ることが出来る。このことから、『密教大辞典』及び『弘法大師全集』は、宥快が『雑問答』を偽撰と判じたとし、ある部分は正しい義として援用し、ある部分については用いないとするのであろう。

しかし、『宗義決択集』の扱いには注意が必要である。快弁の『宗義決択集』凡例には、『宗義決択宗』は、宝性院所伝の本なので宥快の名が記載されているが、論義書は古徳が

起草したものを後生の者が伝写し相承しているものであるで、必ずしも宥快が直接著したものとは限らない、と記しているからである。従つて、『心地観経』を理由に『雑問答』の真撰を疑つているとしても、それが直ちに宥快自身の立場であつたと言ひ切るといふことは難しい。

そこで次に、宥快が直接関わつた著作において『心地観経』の問題がどのように扱われているのかについて検討する。『即身成仏義鈔』には、次のような問答が見える。

問。即身成仏ノ文証ハ限ニ上來所引ノ八ケノ文ニ可レ云乎。

答。不レ然。明ニ頓証ヲ文等多シ之。今ノ所引ハ是少分也。故ニ次下ニ云タ如是等教理証文ト。等言ハ等取スト余文ヲ見タリ。大日經開題ニ云ク、以テ此三方便ヲ自ラ浄メ三業ノ垢ヲ。此ノ生ニ満ニ足ス地波羅蜜ヲ。不レシテ歴劫數ヲ肉身ニ成仏スルカ故、此經ニハ云ニ不捨レ於此身遊歩大空位ト。（中略）又真言問答ニ出ス頓証ノ文ヲ可レ見レ彼。

即身成仏の証文は空海が挙げた八箇に限るのか、という問いに対して、宥快は多種の証文があるとし、『大日經開題』に見える証文を挙げ、また、『雑問答』に挙げられる頓証の文も見ろべきだと答えている。

この問答では、『心地観経』についての直接的な言及は見られない。だが、『雑問答』の頓証の文とは、「第四經題名義」に見える即身成仏の証文を指すと考えられ、その証文には、

『宗義決択集』に偽撰の理由として挙げられていた『心地観經』の引用文が含まれている。有快は『雜問答』の『心地観經』援用については何も触れず、『大日經開題』と同様に真撰として扱っている。すなわち、有快自身の著作からは『心地観經』を理由に『雜問答』を偽撰と見なしていたかどうかは明らかにされないのである。

このことから、『宗義決択集』に見える『心地観經』を偽撰の根拠とする説は、有快の頃から提唱されていたのかどうかについて、更に吟味する必要があるだろう。

それでは、有快は『雜問答』を完全に真撰であると考えていたのだろうか。それに関して、『即身成仏義鈔』に次のような問答が見える。

一、依^ラ異本即身義・真言問答等^ニ者、此文ハ小機多生ノ成仏^ニテ可^レ非^ニ即身成仏ノ証文^ニハ。何^ソ今引^ニ証^シモ^ラ之^ヲ一乎。……
答。今^ノ御引証ノ意ハ即身成仏証文ナル故ニ頓証ノ義不^レ可^レ及^ニ疑^ニ。

十六生^ト者^ハ是^レ十六大菩薩生ノ故ニ、功德ノ生ニシテ非^ニ隔生^ニ。……⁽¹²⁾

この問答では、異本『即身成仏義』第二本や『雜問答』に、大機・小機や一生・二生といった多生の成仏を認める成仏説が説かれることが取り挙げられる。『雜問答』には、一生・二生成仏それぞれの証文が挙げられるが、『金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』の「後十六生成正覺」の經文を、二生の成仏に配当しているため、異本『即身成仏義』と同様に一生

成仏の証文ではないと見なすことが可能となってしまう。

この多生成仏説については、有快以前にも様々な議論がなされ、特に賴瑜が異本『即身成仏義』の小機説や『雜問答』の二生成仏説を会通して、十六大菩薩生の問題を解決し、自身の成仏説として昇華させたことは、既に研究が出されている⁽¹³⁾。小稿では賴瑜などの先師の釈には立ち入らないが、有快は先程挙げた問答の後に、「二義に云く」として道範や賴瑜の解釈を五義挙げ、その第一の義に「二義ニ云々、彼ハ非^ニ大師御作^ニ歟。然者不^レ可^レ依用^ス」。仍^テ上ノ文ハ大機即身成仏、今ノ文ハ小機多生ノ成仏ト不^レ可^レ分^ニ別^ニ。共^ニ是^レ一^ニ生頓悟ノ明文也」⁽¹⁴⁾と異本『即身成仏義』を偽撰と見做す説を挙げている。

有快が『雜問答』と同様に、異本『即身成仏義』も偽撰であると疑っていたことは既に知られる所である。『即身成仏義鈔』にも、その態度がはっきりと見えることから、恐らく、有快は第一義を依用したのだろう。そして、偽撰と考える異本『即身成仏義』説を否定する箇所では、『雜問答』も多生の即身成仏説に言及している書物であると見做している。このような点において『雜問答』も偽撰と疑っていた可能性がある。つまり、有快は『雜問答』に関して基本的に真撰の立場を取っていたと考えられるが、空海の義と矛盾する一生・二生の成仏説については、空海の説ではないと判じたのではないかと推測する。

從來、有快は『雜問答』に対して、『宗義決択集』にみえるように、偽撰とも真撰とも取る日和見主義的な態度を取っていると考えられてきたが、『大日經疏鈔』の例から、基本的に『雜問答』を真撰と考え、引用していたと考えることができる。ただし、『即身成仏義鈔』に見えるように、一生・二生成仏説のような、異本『即身成仏義』の説と類似する教説については部分的に否定し、偽撰と疑っていた可能性を指摘できる。

『宗義決択集』に見える『心地観經』を根拠とする偽撰説については、同書が論義書であるということ、また『即身成仏義鈔』では特に『心地観經』について触れられないことから、更なる検討が必要である。

- 1 有快は『真言問答』の名で自身の著作の中に引用しているが、小稿では『弘法大師全集』第四輯に所収されている書名に従い、『雜問答』という書名を用いる。
- 2 台密文献では、実導仁空『義釈搜決抄』や『溪嵐拾葉集』に引用がみえる。
- 3 大正六〇・二八頁下。
- 4 大正六〇・五〇頁上。「問」以下は『雜問答』（弘全四・一六三頁～一六四頁）からの取意文。
- 5 弘全四・一六二頁～一六四頁。但し、『豈論同日』は原文では「豈同而論」である。
- 6 真全一九・二〇〇頁下。
- 7 真全一九・一〇頁上。
- 8 真全一九・一三頁下～一四頁上。
- 9 真全一九・五頁。
- 10 真全一三・二二三頁下～二四頁上。
- 11 弘

- 全四・一五五頁～一五七頁。
- 12 真全一三・一九〇頁下～一九一頁上。
- 13 『雜問答』「第四經題名義」では、「問。如此等義爾ヲ耳。今所ハ建^ニ立^ス不^レ歷^ニ三劫^一。此ノ生^ニ即^テ上^ニ菩薩地位^一即身成仏^{スル}之義抑有^ニ依憑^一耶。答。証文甚多。」（弘全四・一五五頁～一五七頁）と述べ、証文が挙げられている。
- 14 大正一八・三三一頁中。
- 15 頼瑜の即身成仏思想については、藤田隆乗「頼瑜の成仏觀」『智山學報』四二（五六）一九九三・三、大久保良峻『大日經疏指心鈔』と台密」『新義真言教の研究』二〇〇二・一〇、大塚伸夫「頼瑜僧正の即身成仏思想について——『即身成仏顯得鈔』を中心に——」（『新義真言教の研究』二〇〇二・一〇）などが挙げられる。
- 16 真全一三・一九一頁上。
- 17 『即身成仏義鈔』（真全一三・一七六頁）に「如^ニ即身義^一者、為^メ三師ノ御製作ト有^ニ多本^一事尤不審也。然者於^テ自余ノ本^ニ者、非^ニ大師ノ御作^一歟」と見える。

〈キーワード〉

『雜問答』、有快、『大日經疏鈔』、『宗義決択集』、『即身成仏義鈔』

（早大大学院博士課程）

served it to have a connection with Tiantai Zhiyi's thought (天台智顗) in his work named '*Study on the Great Master Bodhidharma*' (『達摩大師の研究』).

So in this article, I will reexamine and revise of the *Chengxin lun*.

28. "A Circle Drawing" (A Collection of Zen Circles Known as "Yuanxiang 圓相"): Background of Editing "A Circle Drawing"

SEO Eun-joo

In 13th century, Pojo Chinul (1158-1210) published documents about the theory of reconciliation of Zen practice and Zen doctrines by the Zongmi school, and he started the Suseonsa 修禪社 meditation group. At the same time, Zhiqian (1145-1229) published "A Circle Drawing" (a collection of Zen circles or Yuanxiang 圓相) expounding on the advantages of the Patriarchal Zen system that used the Zen circle dharma of the Gui Yang School, a Patriarchal Zen system.

Zhiqian, influenced by Shunzhi in Five Crown Mountain (829-893), accepted the idea of a Zen circle from the Gui Yang School. Later on his life, Zhiqian went into seclusion in Jangdan where Sunnzhī had introduced the Gui Yang School to the Korean Peninsula for the first time. In Jangdan, Sunnzhī practiced the Zen of the Gui Yang School, which expressed inexpressible spiritual experiences through Yuanxiang. He also managed to edit "A Circle Drawing".

29. On the *Zō-mondō* Attributed to Kūkai: the quotation in Yūkai's works

RINZAN Mayuri

This study attempts to identify the reasons why Yūkai, a scholar-monk of the Shingon School in the Muromachi era, presumed that the *Zō-mondō* was not Kūkai's work, despite the fact that it had generally been believed to be his work until the early Kamakura era. Yūkai's conclusion has been accepted in academia. Therefore, in order to confirm the foundation of Yūkai's supposition, this study examined quotations of the *Zō-mondō* in Yūkai's works. The findings are that the *Zō-mondō* contradicts Kūkai's *Sokushin-jōbutsu-gi* and that the *Xindiguan jing*, which had not yet entered Japan in Kūkai's

times, is excerpted in the *Zō-mondō*.

30. The Relationship between the Lineage of the *Kongō-himitsu-Sannō-denju-daiji* and the Eshin-school

PAEK Seung-youn

The *Kongō-himitsu-Sannō-denju-daiji* (金剛秘密山王伝授大事) includes inconsistent descriptions of which school had handed down the text. One description shows that it is ascribed to the “Eshin-school (恵心流)” and another shows that it is ascribed to the “Kajii-school (梶井流).” This seems to be contradictory because the Kajii-school is considered generally as a kind of Danna-school (檀那流). Kakujō NOMOTO (野本覚成) interprets this contradiction as implying that the Shinzō-school (神蔵流), a kind of the Eshin-school, called itself the Kajii-school. Based on his understanding, this paper examines the lineage of the *Kongō-himitsu-Sannō-denju-daiji* more closely by consulting other texts of the Eshin-school and considers the relationship between the *Kongō-himitsu-Sannō-denju-daiji* and the Eshin-School.

The conclusions are as follows: I. the *Kongō-himitsu-Sannō-denju-daiji* had already been established as a unit of text when Gōyū (豪祐) received it from his predecessor. This is drawn from the fact that the date of the incident was mentioned for the first time in the colophon. The text still existed as the Shōgyōzō-version (正教蔵本) and the Tenkaizō-version (天海蔵本), II. Kyōchū (経忠) can be identified as Jichū (慈忠), the chief priest of Jōdo-ji (淨土寺) temple, who is a young brother of Tsunetada FUJIWARA (藤原経忠), the minister of the left (C.E. 1302 - 1352), and III. the lineage up to Keichin (慶珍) appearing on the Shōgyōzō-version and that up to Seikai (盛海) appearing on the Tenkaizō-version can be found in other texts of the Eshin-school. It should be stressed that the last point reveals that the *Kongō-himitsu-Sannō-denju-daiji* is not ascribed to the Danna-school, but to the Eshin-school.

31. On Shōgen's *Shikan girei inokuma shō*

KUBOTA Tetsumasa

Shōgen was a learned priest of the Japanese Tendai school in the 14th cen-